







ちどは、そいつの、すばらしい突進にあって、ふとももをやられたがひるまずとびかかり、とうとう、そいつをたおしたのだ。

「でも、おとう、よくやったなあ。おれたちは、おとうの大活躍をたえた。」

狩りの祭りは、夜どおしにぎやかにつづけられ、夜がしらじらと明けはじめるころ終わった。

翌朝、狩りの獲物の分配がはじまる。狩りは、ひとりの力のできるものではない。だから、たとえ狩りでどんなすばらしい手がらをたてても、それが、みんなじぶんのものにはならない。

毛皮と角は、手柄をたてた者の間でもらえるが、肉は、村人の数によって、平等に分配されるのだ。



わけてすすんだ。このヨシの茂みには、大ぜいのヨシキリたちが巣をかまえていて、おれたちの足音をきくと、いっせいに飛び立った。

ヨシの茂みをすぎると、こんどは、ヤマブキシヨウマやカヤなどの背たけ以上もある雑草の茂みだ。この雑草のなかをはいくぐっていくだけでも、よいいではない。そのうえ、マムシなどの毒ヘビがいるから、ぶっそうだ。やつらが、のんびりと昼寝でもしているところを、そのしっほでもふんづけたら、それこそたいへんだ。逃げようたって、草の茎やツルにさえぎられて、あつというまに、かみつかれる。

だから、おれもシロも、しっかり棒をにぎりしめ、あたりに目をくばりながら、おおいかぶさるように茂っている雑草のなかを、かきわけ、進んでいった。

やがて、雑草の茂みにひよろひよろのびたナラやクヌギの木立ちがみえると、おおいかぶさるように茂っていた雑草も、背たけの低いサルトリイバラやホタルカズラやヤマブキソウなどにかわる。

このあたりから、だんだん、北の森へはいつていく。山には、クヌギやカシやシイなどの樹木が多く、青い葉をい





「まあ、おれにまかしとけ。」

シロは、ゆうゆうたるものだ。

おりから、林のなかには、まっ赤にうれた山モモが、いっぱい実をつけていた。おれたちは、そいつをもいで食った。おれとシロは、サルトリイバラのつるが、からみついているウラシロの、いっぱい生えた林のなかをかきわけて、そのがけへ迫った。

と、そのときだ。すぐ目の前の茂みが、ガサガサとゆれた。おれたちは、立ちどまって目をこらした。すると、目の前から、ニューッと、小さな熊の顔がとびだした。おれたちは、とたんにびっくりした。

「あ、子熊だ。」

その声に、おどろいた子熊は、また、ひよいと首をすくめて、茂みのなかにみえなくなった。